

親鸞仏教センター通信

 2012.
March

第40号

2012年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

 ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

「現代と親鸞」ということ

親鸞仏教センター研究員 内 記 洸

ここ、「親鸞仏教センター」の根幹にあるのは、「現代と親鸞」ということである。2001年の設立以来、東京という、時代的な変化が最も迅速に、最も顕著に表れる日本の中心地において、現代という時代的な状況と親鸞において示された思想とがいかなる接点をもちうるのか、ということがさまざまなかたちで探求されてきた。ただ、現代と親鸞思想との接点を探る、というこの課題の裏には、実は“もうひとつの接点”が含意されているように思う。

「現代」とは何か。それは過去の歴史事象と比較されてあるような、相対的なひとつの時代区分ではなく、私たちの各々が具体的に直面している「今」であり、「ここ」である。どれだけ現代的な社会事情に精通しようとも、そのつど刻々と変わりゆく、自分自身の目の前の「今、ここ」という現実を目を向けるのでなければ、それは空想的な何かに過ぎない。このことは、「親鸞」とは何か、という問いにおいても当てはまる。「親鸞」というものを思想内容としてのみ抽出した場合、それはすでに「親鸞」ではない。

実際に親鸞聖人の言葉を紐解くとき、そこには親鸞自身の「今、ここ」が溢れていることに驚く。『歎異抄』は親鸞の「つねのおおせ」として、「弥陀の^{ごこうしゆい}五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」という言葉を伝えているが、この言葉は、「現代と親鸞」という課題が親鸞においてすでに成り立っていたことをよく表している。釈尊最後の言葉に「自燈明、法燈明」とあるように、本当に大切なことがら——真理や法と呼ばれるもの——は、一人ひとりの目の前の「今、ここ」に常に凝縮されている。現代を生きる私たちに引きつけて言うならば、その「現代」という一点においてのみ、「私」と「親鸞」とが接点をもつ。

当センターに来て一月ばかりたったころ、「それぞれが納得するようにやってください」という言葉をいただいた。「親鸞」とは研究者だから学ぶものではない。それはまた、仏教者だからでも、真宗の僧侶だからでもない。「私」自身が本当に「納得」できるということ。「現代と親鸞」という課題は確かに東京の一研究機関が掲げている標題にすぎないが、それは一部の研究者に閉じられた課題ではなく、「今、ここ」を生きるすべての人にとって、その一人ひとりが担っていく根本的かつ具体的な課題である。東日本大震災以後、特に「社会に対して何をなすべきか」という論調が強いが、どこかそうした要求自体にふりまわされて「今の私」が見失われてしまっていないか。本当になすべきことが定まるのは、「私」が定まるときである。

「現代」とは何か。「親鸞」とは何か。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」②

存在の真理に対する疑い

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第47回、48回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「第二十願」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第45回から一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

■ 自力の努力のうちにある疑い

第十九願は方便化身土の願であるわけですが、その方便化身土を表すときに、親鸞は『大無量寿経』の後ろのほうの「智慧段」と言われている内容を引用している。そこに「疑惑」という言葉がある。疑いとは何であるかという、仏教の定義では、「ちょっと待てよ」と、「猶予」というふうに定義されている。ちょっと待てよということは、そこですぐハッとわかって決断することができない。結局、仏の教えをそのまま聞けないのです。

親鸞もこの疑いに随分苦しめた。そこに方便化身土という問題も関わるのです。つまり、『観無量寿経』の救いは、九品に分けて、それぞれが努力して生まれていく世界をどうも語っている。それを代表的に九つに分けて、それぞれ違った人間に、違ったかたちで浄土が現れてくる。努力を呼びかけるということは、人によって努力の内容が違ってしまふのはやむをえませんから、立派な努力をした人間はよい世界へ行く。できなかった人間は地獄にでも落ち

る。そのように見るのは当たり前です。でもそれでは、どのような命であっても平等に本当の救いを与えたいという如来の願いに背くわけです。悪人でも生まれられると。でも全部違う世界なのだと。人間が求めて得たとなると、そういう世界になりますよと。実は、それは本当の大悲に対する深い疑いなのだと。つまり、本願の救いを本当に信ぜよと言われて^{から}いるのに、先ほどいった猶予という問題が絡む。やはり自分の努力のほうの方がわかりやすい。自分はこれだけ善いことをやったので、これだけ善い結果を得た、と思いたい。精一杯善いことをして、人の喜ぶことをし、人がたすかるようなことをして、自分は善人であると思って、その結果を得たと思っている世界は、実は深い疑いがある。そのことに気づけない。

■ 死後往生の考え方にある二心

その疑惑は、結局、現在生きているということに対する根の深い疑いに関わっているわけです。自力で往生しようと思えることが疑いだとは自分では全然思わない。それは人間が積極的に疑う疑いではない。けれども、そこに存在了解として、実は疑いに関わっているのだと。

疑いに関わるということは、ちょっと待てよということですから、今の時間を二分化して、「今」と「臨終」というように時間を二つに分けて、救いも二つに分けて了解しようとする。疑いを親鸞は「二心」というのです。二つの心でものを見ている。疑いがなくなるということは「一心」が成り立つということ。二心というのは、あっちのことも考え、こっちのことも気

にしている。分裂しているわけです。みんな二心で生きているから、死んだら往けると教えられと安心するのです。今たすからなくても、死んだら往けるのならよいかと。現在はたすかっていないということです。そういう救いを仏陀はわれわれに呼びかけているのではない。親鸞は、この愚かな身のままにたすかるのだと。疑いが晴れるということが、たすかるということだと。われわれは、愚かな凡夫であり、深い疑いをもって生きている。そういう深い疑いに苦しんでいる人間に、如来は一心を与えたいのだと。

■ 自分自身に対する疑い

われわれが普通感じる疑いは、このことはどうなのかな、という理性が感ずる疑いです。しかし、生きていること自身の根にある疑い、存在論的疑問、こういうものを親鸞は取り出してきたのです。これは対象を疑っている普通の疑いとは違う。自分の存在の成り立ちについての疑い。理性が対象を疑う疑いではなくて、存在の真理に対して、それを素直に受け入れることができないという疑いです。

存在に対する疑いというものは、何を疑っているのやら、われわれはよくわからないのです。それはつまり、今、与えられてあることに自分が納得しない。今ある情況、例えば、男性であるということも、男性でよいのかどうか。女性であるということも、女性でよいのかどうか。あるいは、さまざまな因縁で繋がっている家族関係がこれでよいのかどうか。生きてきた軌跡、こういうふう生きてきたがこれでよいのかどうか。そういうことの全部を包んで、今、自分はここにあるということを、本当に納得するかと問われれば、われわれは納得できない。あれも取り替えたい、これも取り替えたい、あそこも直したい、こちらもどうにかしたいということだらけです。これでよいとは、なかなか思えない。それは実は煩惱の身で感じている正直な事実なのです。そのことが存在に対する疑いなのです。だから現在たすからないのです。

先日、この世に本当に偉い人がいるのだと思って、感心してお話を聞きすることがありました。それは、カトリックのシスターの高木慶子先生という方のお話だったのですが、最後のところでおっしゃることは、われわれとほとんど同じだと思いました。それは、与えられているままを、ありがとうございますといいただくのだと。それが私の祈りですと。これは、「ナンマンダブツ、ありがとうございます」というのと、ほとんど同じだ。それぞれ立場は違うので、言葉も違うし、歴史も違いますから、考え方も違うところがあるとは思いますが、結局、存在を本当に受け止める。与えられている一人ひとりの宿業因縁を本当に疑いなく受け止めるということが人間の課題であることには変わりはない。

けれど、人間は受け止められない。それが疑いなのです。そういう質の疑いは、なかなか自分でも見えない。疑いという外に対する疑いだと思っている。友だちに対する疑いや会社に対する疑い、一番近くは連れ合いに対する疑い、そういう一番近いところでさえ一枚にはなれないと思っているけれど、自分自身に対する疑いがあるとは思っていない。でも、それが実は人間がたすからない根本原因である。これを教えているのが、この第十九願ではないかなと思うのです。（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日時：2012年3月 6日(火)午後6時30分～9時
4月 休 会
5月16日(火)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

■『尊号真像銘文』研究会報告■

現代語化に先立って

親鸞仏教センター研究員 内 記 洸

当センターではこれまで、「聖典の試訳」と題して聖教を現代語で表現することを試みてきた。『歎異抄』、『唯信鈔文意』に続いて、この度、新たに2011年6月から始まったのは『尊号真像銘文』の現代語化をめざす研究会である。今回は、研究会の具体的な報告に先立ち、その初回において確認された、当研究会が目指す方向性についての報告である。

■『尊号真像銘文』とは

『尊号真像銘文』とは、当時、本尊として掲げられていた「名号」(＝尊号)や諸師方の肖像画(＝真像)に付された讃嘆の文を、親鸞聖人がかな文字によって平易に説き示したものである。伝えられているものには、巻末に「愚禿親鸞八十三歳 書之」という記載がある「略本」と、「愚禿親鸞八十六歳 書之」と記されている「広本」とがあるが、前者から後者にかけては取り上げられている「銘文」の数が大幅に増加している。『大無量寿経』の第十八願文の引用から始まり、七祖や聖徳太子の銘文を経て、聖人自身の「正信偈」の文の説明で結ばれている本書は、形式は異なれども同じく晩年に著された「和讃」や「正信偈」に通じるものがある。

この『尊号真像銘文』はまた、漢字ではなくかなによって書されているため、「仮名聖教」とも呼ばれている。この「仮名聖教」と言われるものには、他に『一念多念文意』や『唯信鈔文意』が伝えられているが、この両著の末尾には、共に「いなかのひとびと」についての言葉が添えられている。いわく、「いなかのひとびと

の、文字の^{もんじ}ころもしらず、あさましき愚痴きわまりなきゆえに、やすくころえさせんとて、おなじことを、たびたびとりかえしとりかえし、かきつけたり」(『真宗聖典』559頁、東本願寺出版部〈以下『聖典』と略記〉)。つまり、『尊号真像銘文』を含む「仮名聖教」とは、漢字で伝えられてきた古今の経・論・釈の文を関東の門弟たちに易しく説き伝えるための書である、と一応は考えてよいであろう。

■読む、ということ

では、親鸞聖人が本書において「とりかえしとりかえし」伝えようとしているものは何であったのか。本研究会に限らず、テキストの読解や訳文の作成ということにおいては、客観的に見て正しい理解、了解というものが求められるのが普通である。一定の「枠」を押さえることのない、単に恣意的な理解では了解を共有することができない。ただし、釈尊に始まる仏教が示し、「真宗」という言葉を掲げた聖人が語ったのは、単に「正しいこと」である以上に、何よりまず私たちの一人ひとりが生きるうえでの「大切なこと」であると言うべきではないか。宗教や哲学と呼ばれるものも、何も私たちの日常からは遠く離れた理想や空想を語っているわけではない。私たち自身の日常を振り返ってみれば十分わかるように、人が最も関心をもち熱意をもって語るのは、当人にとって抜き差しならない問題、大切な事柄を中心点とした、極めて具体的な、日常に密着した問題であるはずである。「宗教として」語られていることと、一人ひとりにとっての大切な問題、つまり今、目の前に具体的な生活としてある問題

とはこの意味では本来ひとつである。

このことはまた、私たちが読み手となるときにも当てはまる。伝えられている「大切なこと」とはいったい何なのか、と問うとき、受け手となる私たち自身もまた、その「大切なこと」をめぐる同質の実感の中にいるのでなければ、そもそもその大切なことを語り手と同じところで実感することはできないであろう。

「聖教」というものを考えてみても、私たちがそれを“どのように”受け取っているかによって、それが本当に「聖教」であるのか、それともどこにでもあるような他の書物と変わらないものであるのか、その文章の意味がまったく違ってくる。聖人が語る「大切なこと」に向かい合うということは、自ら同質の「大切なこと」をもって向かい合うのである。

■ 現代語にすること

したがって、「大切な言葉」を読むということは、自身の生活上、最も具体的な実感をもって、つまり最も具体的な「自身の言葉」において読むということに他ならない。かつて「聖典の試訳『歎異抄』」の研究会が始まったとき、高史明氏から、「現代語訳『歎異抄』ではなく、現代語『歎異抄』をつくってください」という言葉をいただいたと聞いているが、それはまさしく、『歎異抄』という“聖教”を単に現代的な言葉に移し替えるのではなく、現代という時代を生きる——あるいはどこまでも、現代という時代においてしか生きることでできない——自分自身の言葉において、『歎異抄』が語る「大切なこと」を受け取ってほしい、との願いであったのではない。「言葉」という容器を現代風に取り替えようというのではなく、聖人の言葉の容器に満たされた「中身」を、もう一度自分たちの言葉の容器で汲みとらなければならない。このように考えるならば、当センターの設立以来続いてきた「聖典の試訳現代語」研究会の試みとは、現代人にとってわかりやすい表現を提供しようという特殊な翻訳事業なのではなく、第一に、「大切なこととは何

か」ということを自らの切実な問題として受け止め、自身の言葉に置き換える、という当たり前の営みに他ならない。

『歎異抄』が唯円が親鸞聖人から受け取った「大切なこと」であったのと同様に、『銘文』は聖人自身が受け取った「大切なこと」である。先に「いなかのひとびと」への聖人の言葉を紹介したが、法然上人から「浄土宗のひとは愚者になりて往生す」（『聖典』603頁）と聞き、和讃において「よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのころなりけるを 善悪の字しりがおは おおそらごのかたちなり」（『聖典』511頁）と語る聖人にとって、仮名聖教における「いなかのひとびと」への言葉というのが他人事であろうはずがない。その「大切なこと」を、私たちははたしてどのようにして受け取り、表現しうるのであるか。「正しい表現」、「正しい翻訳」を求めようとするのではなく、「大切なこととは何であるのか」ということを自らの実感として受け取ろうとする過程なしにそれらの聖教を「正しく」表現することは不可能なのではないか、というのが今現在の実感である。研究会という場においては、聖人の語る言葉の意味、位置について教えてもらうことばかりであるが、『尊号真像銘文』で聖人は何を語ろうとしているのか、そのことをめぐる研究員一人ひとりの受け取りをきちんと確認しながら、自分自身の言葉（ただしそれは「自分だけの言葉」ではない）で『尊号真像銘文』を組み立て直す機会と考えたい。それが伝わるかどうかの問題は、また別の問題であろうと思う。



研究会の様子

もとにして、自力の菩提心をおこしき。恒沙の善根を修せしによりて、いま願力にもうあうことをえたり。他力の三信心をえたらんひとは、ゆめゆめ余の善根をそしり、余の仏聖をいやしゅうすることなかれとなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五五～五五六頁)

試訳をめぐって

【原文】横は、よこさまという。超は、こえてという。よろずの法にすぐれて、すみやかに、とく生死海をこえて、仏果にいたるがゆえに、超ともうすなり。これすなわち大悲誓願力なるがゆえなり。

【現代語訳】横は、よこさまにということ、超は、こえてということである。あらゆる教法にまさって、速やかに、ただちに迷いの海を超えて、仏果に至るのだから、「超」というのである。これが成り立つのは、大悲の誓願のはたらきだからである。

力に遇いがたくして遇うことができたのである。阿弥陀如来のはたらきによって信心(至心・信樂・欲生)を得た人は、念仏以外の修善を誇ったり、その他の仏や聖人たちを決して卑しめてはならない、というのである。

私たちが捨てきれないものに「比較心」がある。だから、「よろずの法にすぐれて」といわれれば、どうしても「比較して勝って」という思考回路がはたらいってしまう。例えば、それは『愚禿鈔』においては「堅」といわれ、文字通り物事を縦型に考え見ていこうとする、すなわち努力のうえに成り立つ方である。ゆえに、数値化もできるし、世間的見地からすれば至極真つ当うなあり方と言えるだろう。それに対し親鸞は、「横」という概念を提示する。「よこさま」という、それこそ世間的には「間違っている」「正しくない」という意味合いの言葉を用いて、自らが立つた仏道を逆説的に説いていくのである。具体的には、「堅」に立ち上がれないような人間が助かるというような意味で、「この愚かな人間に相応しく」という意味で、「よろずの法にすぐれて」というのである。つまり、比較を超えているということ、無上上ということ。「南無阿弥陀仏」の救い、その質の違いが「横」という一文字に凝集されている。

また、「仏果に至る」と表現されているところに、人間が求めて至らなければいけない究極の果、そこに一挙に至るという、時間をはさまないという親鸞の仏道感覚が研究会で確認された。

(訳：親鸞仏教センター)

親鸞仏教センターの動き

(2011・11～2012・1) 一抄出

■2011年

- 11・1 第6回「尊号真像銘文」研究会
- 第47回(通算・第98回)連続講座「親鸞思想の解明」(東京国際フォーラム)
- 11・8 第133回英訳「教行信証」研究会
- 11・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 11・22 第112回清沢満之研究会
- 12・1 第18回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会情報誌「B.E.E」第22号、研究誌「現代と親鸞」第23号、機関紙「親鸞仏教センター1通信」第39号を発行。
- 第7回研究員と読む公開輪読会「真実心の探求」
- ②12/8③12/15④12/22(文京区・東京大学仏青会館)
- 第7回「尊号真像銘文」研究会
- 12・6 親鸞聖人ご命日のつどい
- 12・9 第131回英訳「教行信証」研究会「如美修行相応としての大行」鈴木大拙訳「教行信証」
- 12・12 「ケル」管見」大谷大学非常勤講師・マイケル・コンウェイ氏(東京国際フォーラム)
- 12・14 第135回英訳「教行信証」研究会
- 12・16 第133回清沢満之研究会
- 12・19 「公開講演会2011」テーマ「言葉のリアリティ」秋葉原事件が問いかけられるもの。
- 12・26 北海道大学公共政策大学院准教授・中嶋岳志氏(東京国際フォーラム)
- 12・27 第19回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会親鸞仏教センター報恩講

■2012年

- 1・10 第48回(通算・第99回)連続講座「親鸞思想の解明」(東京国際フォーラム)
- 1・13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 1・17 第7回研究員と読む公開輪読会「伝灯」と精神主義」精神界」を読む①①/13②1/20③1/27④2/3(文京区・東京大学仏青会館)
- 1・18 第8回「尊号真像銘文」研究会
- 1・25 第114回清沢満之研究会
- 1・31 第20回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会第136回英訳「教行信証」研究会

となづく。慶は、よろこぶという。信心をえてのちによりこぶなり。喜は、こころのうちに、よろこぶところたえずして、つねなるをいう。うべきことをえてのちに、みにも、こころにも、よろこぶこころなり。信心をえたるひとをば、「分陀利華」(観経)とのたまえり。この信心をえがたきことを、「経」(称讃浄土経)には「極難信法」とのたまえり。しかれば『大経』には「若聞斯經 信樂受持 難中之難 無過此難」とおしえたたまえり。この文のこころは、「もしこの『経』をききて、信ずること、かたきかなかにかたし、これにすぎてかたきことなし」とのたまえる御のりなり。釈迦牟尼如来は、五濁悪世にいでて、この難信の法を行じて、無上涅槃にいたると、ときたまう。さてこの智慧の名号を、濁悪の衆生にあたえたまうとのたまえり。十方諸仏の証誠、恒沙如来の護念、ひとえに真実信心のひとのためなり。釈迦は慈父、弥陀は悲母なり。われらがちち・はは、種種の方便をして、無上の信心をひらきおこしたまえるなりと、しるべしとなり。おおよそ過去久遠に、三恒河沙の諸仏のよにいでたまひし

びが絶えることなく、常にあるということである。人間として獲得すべきことを得て身も心もよろこぶ、という意味である。信心を獲得した人を『観無量寿経』では「分陀利華」(白蓮華)といい、この信心を獲得しがたいことを「称讃浄土経」では「極難信法」と説いている。それを、『大無量寿経』では「若聞斯經 信樂受持 難中之難 無過此難」と教えてくださっているのである。この文意は、「たとえこの『経』を聞いても、それを信ずることは難しい中でも特に難しい。これ以上に難しいことはない。」という教えである。

釈迦牟尼如来は、悪事がはびこる五濁の世に現われて、この信じ難い法を行じて無上涅槃の覺りに至る、と説いてくださった。そして、智慧そのものであるこの名号を、濁悪の衆生、つまり悪を重ねずには生きられず、まことの依り処を見いだせないわれらに与えるのだ、と説かれているのである。あらゆる世界の諸仏がこの名号を真実であると証明されるのも、またそれを、数限りない如来が念じ護つてくださるのも、ひとえに真実信心の人のためなのである。釈迦如来はわれわれを慈しむ父であり、弥陀如来は憐れんでやまない母である。われらの父母が、さまざまの手だてをもつて、われらに無上の信心を開き発してくださるのである、と知るべきだというのである。久遠の昔より、無数の諸仏方が世に現われてきた。その仏のみもとで私たちは、そのつど自力の菩提心をおこし、数限りない善を修めてきた。しかし、いま如来の本願

なり。「専」は、一いちということばなり。もつぱらというは、ふたごころなかれとなり。ともかくもうつるごころなきを「専」というなり。この一行一心いちぎょういちしんなるひとを摂取せつしゆしてすてたまわざれば、阿弥陀あみだとなづけたてまつると、光明寺くわうみやうじ和尚しやうは、のたまえり。この一心は、横超おうちやうの信心なり。横おうは、よこさまという。超ちやうは、こえてという。よろずの法にすぐれて、すみやかに、とく生死海しやうじかいをこえて、仏果にいたるがゆえに、超ちやうともうすなり。これすなわち大悲誓願力だいひがかりきなるがゆえなり。この信心は、摂取せつしゆのゆえに金剛心こんごうしんとなれり。これは『大経』の本願の三信心なり。この眞実信心を、世親菩薩せしんぼさつは、願作仏心がんさぶつしんとのたまえり。この信樂は、仏にならんとねがうともうすごころなり。この願作仏心がんさぶつしんは、すなわち度衆生心どじやうしんなり。この度衆生心ともうすは、すなわち衆生をして生死しやうじの大海だいかいをわたすごころなり。この信樂は、衆生をして無上涅槃ねはんにいたらしむる心なり。この心すなわち大菩提心だいぼだいしんなり。大慈大悲心だいじだいひなり。この信心すなわち仏性ぶつしやうなり。すなわち如来にやうらいなり。この信心をうるを慶喜きやうきというなり。慶喜きやうきするひとは、諸仏とひとしきひと

である。「専」は、一いちという意味である。もつぱらとは、二心があつてはならないということである。あれこれと心が移り変わらないことを「専」というのである。この一行一心いちぎょういちしんの人を摂め取つて捨てることがないから阿弥陀あみだと名づけるのである、と光明寺くわうみやうじの善導和尚ぜんどうしやうはおっしゃっている。

この一心は、横超おうちやうの信心である。横おうは、よこさまにということ、超ちやうは、こえてということである。あらゆる教法にまさつて、速やかに、ただちに迷いの海を超えて、仏果に至るのだから、「超」というのである。これが成り立つのは、大悲の誓願のはたらきだからである。この横超おうちやうの信心は、如来に摂め取られているのだから、金剛のごとく堅固けんこな心となつていのである。これは、『大無量寿経』に説かれている本願の三信心、すなわち至心・信樂・欲生の心である。この眞実の信心を、世親菩薩せしんぼさつは「願作仏心がんさぶつしん」といわれている。この信心は、仏に成ろうと願う心である。「願作仏心がんさぶつしん」とは、すなわち「度衆生心どじやうしん」である。「度衆生心どじやうしん」とは、衆生をして迷いの大海をわたらしめる心である。この信心は、すべてのものを無上涅槃ねはんに至らせる心である。この心は大いなる菩提心であり、大いなる慈悲心である。この信心は仏性である。すなわち、如来である。

この信心をうることを「慶喜」というのである。慶喜する人を「諸仏と等しい人」と名づけるのである。「慶」は、よろこぶということ。信心をえて後によろこぶのである。「喜」は、心によろこ

『聖典』の試訳（現代語化）

時折、「信心深くないもので…」と謙遜けんそんされる方にお会いすることがある。しかし、そのような、いわゆる世間一般で考えられている信心と親鸞が明らかにしようとした〈信心〉とはまったくの別物である。

「善信（親鸞）が信心も、聖人（法然）の御信心もひとつなり」（『歎異抄』聖典六三九頁）。大勢の法然門下のなかにあって、善信のこの大胆な発言は大変な物議をかもしたようである。智慧才覚ひろしと尊崇そんぞうされていた師、法然である。その法然の信心と、若輩で一弟子に過ぎない善信の信心が一緒であると言うのだから、兄弟子たちが怒るのも無理はない。しかし、能力・経験の延長線上に信心を見ていくというこの考え方は、現代にもよく馴染むのではないだろうか。

だが、〈信心〉とは自分で起こす心ではない。善信には、信心などとても起こせないわが身であるという根源的自覚があったのだろう。それは仏道を歩もうとする者、すなわち人生をまっとうしようとする者にとつては絶望であり、大きな悲しみであつたに違いない。

悲しみ……。そこに親鸞と法然を支えたひとつの大地があり、〈信心〉の源泉があつたのではないか。願作がんさく仏心ぶつしん、度衆生心どしゅうじょうしんということをも展望する、それは〈横超の信心〉である。

（嘱託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑬

原文

「教念きょうねん弥陀みだ專復せんぶ專」というは、「教」は、おしうという、のりという。釈尊きやうそんの教勅きやうちやくなり。

「念」は、心におもいさだめて、ともかくもはたらかぬところなり。すなわち選択せんじやく本願みがんの名号ごうを一向せんじゆ專修せんじゆなれと、おしえたまう御ことなり。「專復專」というは、はじめの「專」は、一行ぎやうを修すしゆべしとなり。「復」は、またという、かさぬという。しかれば、また「專」というは、一心なれとなり。一行一心いちぎやういちしんをもつばらなれと

現代語訳

「教念弥陀專復專」という言葉の意味は次の通りである。「教」というのは、教えるということ、法則ということである。すなわち、釈尊の至上の仰せである。「念」は、心に思い定めて、あれこれと動じないということである。すなわち、本願に選び取られた名号をただひたすらに修めよと教えてくださる、釈尊の御言葉である。「專復專」というのは、初めの「專」は、ひとつの行を修めよということである。「復」は、またということ、重ねるということである。その次の「專」というのは、一心であれということである。つまり、もつばら一行一心であれということなの

● 英訳『教行信証』研究会報告 ⑨ ●

如実修行相応としての大行

—鈴木大拙訳『教行信証』「行巻」管見—

親鸞仏教センター嘱託研究員 田 村 晃 徳

英訳『教行信証』研究会では、2011年12月13日、東京国際フォーラム（千代田区）において、大谷大学非常勤講師のマイケル・コンウェイ氏をお迎えし、研究会を開催した。「『如実修行相応』としての大行—鈴木大拙訳『教行信証』「行巻」管見—」と題された講義では、氏が英訳『教行信証』に出会ったいきさつをはじめ、「行巻」訳語の諸問題について、豊富に例文を紹介しつつ「如実」という言葉を中心に考察が述べられた。ここにその研究会の一部を報告する。



コンウェイ氏はシカゴ在住の際、鈴木大拙訳『教行信証』があることを聞く。そして大谷大学入学が決まった後、ミシガン大学でそれを手にすることができた。「総序」の「調達、闡世をして逆害を興ぜしむ」の訳文や脚注を読み「これから学ぼうとしていることの濃さ」を感じ「少し怖くなった」という。来日当初はゴールデンウィークを利用して、『真宗聖典』と英訳『教行信証』を読み比べていた。

その中で「信巻」の「三問答」の結帙である「如実修行相応故」の訳を読み感動したという。その訳は次の通りである。

‘the practice that is truly in accordance with Reality as-it-is’

「現実そのものに即している行」というこの文章に出会い、求めているものはこれだと感じ、頭からなかなか離れなかった。しかし、その一方でなぜ称名が「如実修行相応」となるの



マイケル・コンウェイ (Michael Conway) 大谷大学非常勤講師
1976年米国シカゴ市生まれ。1997年米国イリノイ州ノースウェスタン大学卒業。2003年大谷大学大学院修士課程真宗専攻入学。2009～2011年大谷大学助教。2011年より同大学非常勤講師。2011年大谷大学大学院にて博士号修得。2011年より東方仏教徒協会編集者。専門は真宗学。

かについての疑問は解けなかった。今回の研究会のテーマは、氏のそのような問いに由来するものである。

氏は、①「如実修行相応」について、②「実」の翻訳の用例について、③「行」及び「業」の諸翻訳の用例について、④「行」の訳語の意味確認、⑤鈴木訳に照らされる如彼名義如実修行相応の大行、という構成で講義をされた。

①では、まず「如実修行相応」について英訳『教行信証』から訳文を抜粋したうえで、その見解を述べた。例えば、「行巻」所収の「かの如来の名を称す。かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、実のごとく修行し相応せん」（『真宗聖典』169頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）の英訳文を引かれた。

'It is the practice of pronouncing the Name of the Nyorai truly in accordance with the Light of Nyorai's wisdom, the signification of his Name, and Reality as-it-is.'

氏は、「名義の如く」と「実の如く」という原文の文字は互いに呼応しているように感じるという。「名号の意味」と「現実に即した」ということが同じであることを言おうとしているのだ、と指摘された。氏が仏教に関心を抱くようになったのは、大拙が'Reality as-it-is'、そして親鸞聖人が「真実」と述べられる真実への関心からであった。キリスト教徒であった幼いときに、その存在を証明することのできない「神」を信じることに對し疑問を抱き、それを自分の生活の基盤にはできなと感じていた。何が真実なのかを知りたいという要求が以前からあったので、現実を本当に見据えることを目的とする仏教の精神に魅力を感じたという。

②については、「行巻」冒頭御自釈中の一文である「真如一実の功德宝海なり」(『聖典』157頁)についての次の英訳文に注目された。

'The Name is the treasure-ocean of the merits accruing from the absolute reality of Suchness.'

氏はこの文章で、大拙が原文にはない'The Name'、つまり如来の「名^{みな}」という言葉を加えて訳していることに注意する。大拙の訳では、「真如一実功德大宝海」とは如来の名('The Name')を指しているのである。この翻訳には南無阿弥陀仏という名号が、真如一実の功德の宝海そのものであり、南無阿弥陀仏という言葉のなかに、そのような真如一実のはたらきがあるということが明確にされている。また、'absolute reality'という「絶対なる真実」「絶対なる現実」という訳語にも注目する。仏教では人間は無明であり、真実に暗いとされる。そのような人間の無明を晴らすものとして名があり、それはまた、人間を'absolute reality'へ導くものとしての名であることが訳されているのだと述べられた。

③については英訳『教行信証』における「行」と「業」の訳語について触れられた。特

に大拙が「行」の訳語について苦勞していることを指摘し、大拙は'practice'という語はあまり好まなかったのではないかと述べられた。氏は、大拙が大行の翻訳として好まなかった理由について、'practice'が何かを得るための行為という意味があることを踏まえたうえで「大行である南無阿弥陀仏は何かの手段ではないということを感じておられた」からではないかと述べられた。傾聴すべき意見である。

④においてさらに訳語の確認をし、⑤では氏が「如彼名義如実修行相応」の翻訳を自ら次のように提示された。

'The great living that works out emancipation by coming into accord with Reality as-it-is through hearing the signification of the Name'

この英訳には、「大行は、名^{みな}の意味を聞くことを通して、ありのままの現実に相応することで、解脱を成り立たせていく生活である」という意味が込められているとされた。名前の意味を聞くことを通して、無明に依った生活ではなく、智慧に基づく生活となる。それが'great living'としての大行であることを述べられた。

その後の質疑応答も活発に行われ、今後の研究会に指針を与えていただける講義であった。

※マイケル・コンウェイ氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第24号(2012年6月1日号)に掲載予定です。



「英訳『教行信証』研究会」(於:「東京国際フォーラム」)

「親鸞仏教センター公開講演会2011」を開催 (2011年12月19日)

親鸞仏教センターでは、今年も大谷大学の後援のもと、12月19日に東京国際フォーラム(千代田区)で公開講演会を開催した。今回は、「言葉のリアリティ―秋葉原事件が問うもの―」をテーマに、中島岳志氏(北海道大学公共政策大学院准教授)をお迎えしてご講演をいただいた後、当センター研究員3名(花園・春近・内記)とディスカッションを行った。会場には有識者やサラリーマン、学生など約100名が参加し、熱心に耳を傾けておられた。

まず講演では、中島氏(写真)が、2008年に東京の秋葉原で当時25歳の男性(加藤智大)が起こした無差別殺傷事件について、その経緯や背景を、特にインターネット上の掲示板への書き込みと、加藤被告を取り巻く人間環境に焦点をあてながら丹念に語られた。

氏は、「加藤は、現実社会で自分は代替可能な存在であり、いつでもリセット可能である。しかし、ネットの世界では自身は代えがたい存在であり、そこに「リアル」がある、と考えていた」と言う。しかし、結局は生きがいにしていたそのネット上の掲示板という居場所を失い、犯行に及んでいったことが語られた。そして、「この問題に、われわれはどういう言葉をもてるのか。仏教者は加藤に何を伝えることができるのか」と投げかけるかたちで講演を閉じられた。

ディスカッションでは、各研究員が現代の若者の生きづらさや、宗教者として苦悩のシグナルをどのように受け止めていくかなど、それぞれの思いを語った。最後に中島氏の「宗教者が何か加藤に語ろうとすると、その言葉を自分自身に突きつけながら伝えていくことができるか。加藤と対峙しつつ自分と対峙することが大事なのではないか。」との言葉で締めくくられた。

※「公開講演会2011」の講演記録は、『現代と親鸞』第25号(2012年12月1日号)に掲載予定です。



親鸞仏教センターのつどいのご案内

親鸞仏教センターでは、設立以来、ご縁のある有識者の方々をお招きして、交流懇談の場として「親鸞仏教センターのつどい」を毎年4月に開催しています。本年はご講師の先生の強いご要望と、設立10周年を迎えることができましたことを記念し、聴講希望の方々に公開した講演会を開催することとなりました。

下記要領でふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

①日 時 2012年4月7日(土) 13時~16時(受付12時開始)

②会 場 学士会館(東京都千代田区神田錦町3-28)

③講 師 講演Ⅰ 辺見 庸氏(作家)
講演Ⅱ 本多 弘之(親鸞仏教センター所長)

④参 加 費 無料(事前申し込みによる聴講券が必要です)

⑤定 員 150名(抽選)

⑥応募方法 往復はがきにて、①郵便番号②住所③氏名④電話番号⑤希望人数(2名まで)⑥年齢を明記して親鸞仏教センターまでお申し込みください。

⑦申込締切 2012年3月21日(水) 当日消印有効

⑧申 込 先 〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7 親鸞仏教センター「つどい」係

※抽選結果(聴講券)は3月30日ごろまでに返信はがきにてお知らせいたします。

※応募者の個人情報、応募者への連絡及び返送のため以外には使用いたしません。

•郵便番号

•住所

•氏名

•電話番号

•希望人数(2名まで)

•年齢(2名の場合
どちらも)

【往信裏面】

ご自分のお名前					
ご自分のご住所					
【返信表面】					

出版物のご紹介

◇『親鸞 いまを生きる』朝日新書(720円+税)

政治学者の姜尚中氏と作家の田口ランディ氏、そして当センターの本多弘之所長による「親鸞フォーラム」でのシンポジウムの内容が、さらに深められて掲載されています。

お求めは一般書店まで



◇『今を生きる親鸞』樹心社(1800円+税)

親鸞の思想を学びながら今の学問をルネサンスするという、新たな風を吹かせる東京大学東洋文化研究所の安富歩教授と、元当センター嘱託研究員の本多雅人氏による対談と書き下ろし原稿が掲載された注目の一冊です。

お求めは樹心社まで TEL 042-577-2778



◇『新講 教行信証一行巻2』樹心社(2600円+税)

当センターの本多弘之所長の相応学舎での講演録です。生きることの根本的課題を『教行信証』に深く尋ねていかれます。

お求めは樹心社まで TEL 042-577-2778



◇『親鸞聖人七百五十回御遠忌記念論集』

上巻『「教行信証」の思想』(3800円+税)、

下巻『親鸞像の再構築』(4000円+税)

宗祖の御遠忌を記念し、親鸞思想にゆかりのある碩学が親鸞像を再確認し、新たな主体の可能性を見いださんとする大谷大学真宗総合研究所編の論文集です。当センターの本多弘之所長の論考も上下巻に収録されています。お求めは筑摩書房まで TEL 048-651-0053



あ と が き

究極のコミュニケーションは言葉ではなく、言葉が必要としない関係だという人がいる。しかし、はたして、そのような関係が成り立つのであろうか。当センターの活動の一つに親鸞思想を現代の言葉で表現するということがある。それは、非常に困難なことである。なぜなら、同じ言葉でも受け取る側によって異なる理解があるからだ。▼設立以来お世話になっている國府田隆夫先生から昨年12月、センター宛にお手紙をいただいた。体調が戻り、ご夫婦で

老老介護をしながらも研究活動を再開できたとのこと。お手紙の内容と一つひとつの言葉に頭が下がった。(金石)

▼「自分は大切な存在だ」と、自分だけで思える人はいるのだろうか。私たちは「言葉」を生きている。作家でなくとも、である。相手をどれだけ大切な存在だと思っても、言葉にして、もしくは行動で表現しない限り思いは伝わらない。「言葉がなくとも伝わる」とは、幻ではないかと実うほどとても難しいことだ。だって、言葉で表現しても、実際はほとんど相手に伝わっていないのだから。言葉で伝えることの難しさと同時に、大切さを思う。(鈴木)